

なんた坂 こんな坂

少し遡るが、
1937年(昭12)
7月7日 盧

溝橋事件が引金で支那事変、やまじへんが日本と中華民国(支那)間で始まり、膨大な軍費が要し、その対策上(昭13)4月酒類販売業が免許制度となり、酒類価格が統制価格となり、酒税が造石税、庫出税の併せ課税される様になった。同時にそれ迄、何処でも販売出来た酒が、販売許可が無ければ「酒」の販売が出来ず、祖父が、免許が得れない店に、強制廃業通知を持って行く役目を担当させられ、気の毒で「ナン」と嘆いていた。支那事変は、その後の中国共産党と中国国民党の合作による徹底抗戦の呼びかけ(7月15日)、及び蒋介石の徹底抗戦の決意の表明、(7月17日)により、中国軍の日本軍及び日本人居留民に対する攻撃もあり、日中戦争が本格化した。



丁稚の「マーチ」や「栄吉さん」らが兵隊にとられ居なくなり、戦争も拡大、酒も配給になった。私は、昭和15年4月雨の日、日教員教員常小中学校に入学した。は組で則武先生、他所の子は、お母さんが「一緒に、私は、おぼあちゃん」と。サイタ、サイタ、サクラガ、サイタが国語読本だった。

※華年 国語学校に代わって

入学直後の4月14日。毎年その日は、店を休業、店全員で「太閤担」で「花見」をする日だった。その用の品を前日に届ける「丁稚の升」とい

緒に行った。帰る際、自転車の後ろ荷台に乗って坂を下った。途中に窪みがあり、足を車輪に巻き込まれ大怪我をした。更に数日後、法定伝染病、シフテリアに被り、京都府立病院、その頃の写真で、切開手術をした。術後病室に運ばれる途中に気が付き、傍のおぼあちゃんに声を掛けた。が、言葉がでない。ビックリし更に大声を出したが、音が出ない、ジフテリア手術で、咽を切開して有って呼吸が通らなく声帯が動かないのだ。悲しくて涙だけ流した。渡された鉛筆で書こうとした。が、入学直後で、字が思い出せなかつた。が、20日程で退院した。入院中の付添は祖母きぬ。当時の私は、お母さんの居ない子だった。



室に運ばれる途中に気が付き、傍のおぼあちゃんに声を掛けた。が、言葉がでない。ビックリし更に大声を出したが、音が出ない、ジフテリア手術で、咽を切開して有って呼吸が通らなく声帯が動かないのだ。悲しくて涙だけ流した。渡された鉛筆で書こうとした。が、入学直後で、字が思い出せなかつた。が、20日程で退院した。入院中の付添は祖母きぬ。当時の私は、お母さんの居ない子だった。

なんた坂

幼稚園、小学校まで、友達には、お母さんやお父さんが「居るのに、僕には、どちらも居らず、おシイちゃんおぼあちゃんだけじゃいかなかった。

お母さんやお父さんが「居るのに、僕には、どちらも居らず、おシイちゃんおぼあちゃんだけじゃいかなかった。私の世話は一カと呼んでいた女中の加代さんがして呉れていた。猫背で小柄な人、チョツとの間でも、居眠りする。祖母が何時も、ボヤいていた。私が小学二年生になった頃、急に居なくなつた。私には、母の様な人になつたので、何で、おらん様になつたんや！と祖母に問い詰めると、お嫁さんになつたんや」と言つた。その後も、何人か女中さんが入れ替わつたが、呼び名は、おかさんだつた。祖母方の親戚の子、房子ちゃんが来て以後は、本人さん名になつた。初代、おかさんと、お亡くなりになるまで、お付き合いは続いた。



稲荷山 ぶらり散策記 越智重史

改ざん「隠へい」ねつ造、国民と国会をめぐむような政治が続いています。国破れて山河あり、城春にして草木深し、時に感しては、花にも涙をそそぎ、別れを恨んでは、鳥にも心を驚かす、誠実に生きることを信念とした中国の大詩人・杜甫の詩です。国都は破壊されても、権力者が毒されても、自然のいとよみの山や河は生きていくという事でしょうか。

を打ち立ててこそ人間の幸福がおとずれると教えられました。我が稲荷山界わいも確実に自然の営みを感じられる生き生きとした季節になりました。ほーほけきよ、けきよ、けきよと鶯の鳴き声、疎水沿いの桜は花筏を浮かべて、一気に葉桜に、本町通りのお百姓さんの庭先には朝堀り竹の子を並べて売っています。

商店街の電柱には5月5日の菖蒲の節句「藤森まつり」のノボリがはためいています。ああ今年も良い季節がやって来たな、ワクワクした気分です。2年生の学期に、祖母が、依壇「前に呼び、病気で里に帰つてはつた、お母さんが戻つて来やばる。それが義郎のお母さんや」と告げた。なんや母さんは居たんや」と嬉しかった。数日後、「マーチ」と呼んでいた丁稚さん「本名政夫」が、ヨシちゃん、これからお母さんの家へ行くから、一緒に行こうか？」と声掛け、超嬉しくて嬉しくて「うん」と言い連ねて貰つた。古い読者の方は前に書いて「存知かも？」その家は、漆、ウルシ、屋で、京町の奥深い家だつた。その中程に、町内された。そこに着物姿の女の人が居た。二つち、おんない！ 此方へ来た。なさいの京言葉」と言われ傍に行つた。義ちゃんやなあ。大きななあに続いて「マア、私の女京言葉」が、お母かあさんや、病気で長いこと留守にして堪忍してや」と言われた。マッお母さん

の日本需要のほぼ100%をまかなつていたといえます。深草を語る(平成25年、著者：深草を語る会)という冊子に、稲荷・深草地域の特産品が掲載されています。今回はこの簡単な紹介です。まずは深草の農業、畑作中心で、伏見とうがらし・竹の子「写真」などの特産品、お茶も明治初期まで栽培されてたようです。深草瓦は文禄3年(1594年)伏見城築城に瓦工御用を命じられ、その後、京都深草御用瓦師として京都御所、一条城、各宗本山に入りました。深草の山から出土する粘土が原料でした。砥の粉は最盛期(昭和30〜40年)には、深草から山科西野山にかけて30軒以上も製造業者があり、当時



商店街の電柱には5月5日の菖蒲の節句「藤森まつり」のノボリがはためいています。

これらの特産品は、ほとんどすたれかかったものの感がありますが、絶対量は少なく、なつたものの貴重な特産物として今でも残っています。冒頭にも述べましたが、人間と自然との節度ある文明を打ち立てた時代の大切な遺産として残していかなければならないのではないのでしょうか。